

---

## 花弁（ボーボボのファンフィクション）

y

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ボーボボのファンフィクション  
花弁

### 【Nコード】

N0603E

### 【作者名】

y

### 【あらすじ】

集英社「ボーボボ・ボーボボ」澤井啓夫先生のファンフィクションです。世界の違いから男は少女を同年代の少年に託し一人去っていくが、その場に自らの本能が現れ心中が曝け出される・・・

## （前書き）

集英社「ボボボーボ・ボーボボ」澤井啓夫先生のファンフィクションです。文章の一部に既存の歌詞をイメージしておりますが、固有名詞、文章を変えております。

「――ーおい首領パッチ、ユキ――ーどこ行つた――ー？」

ボーボボは周囲を見回した。旅の途中の草原、見渡す限りの青い空――ー二人は何処にも見当たらない

「ちっ・・・はぐれちまったか・・・」

まあいい、その内合流するだろうと歩き出そうとしたボーボボの背中 に不意に声が掛けられた

「よう。オリジナル、ひっさしぶりだな」

自分と同じ低い声――ー驚き、振り返つたボーボボの視界に入つたのは――ー

「あの時はよくもやってくれたよなあ？」

自分と同じ髪、体、サンングラス――ーしかしその肌は浅黒く、髪は黒い大男と、その肩に大切そうに抱えられている華奢な美少女

「まったくだよな」

少女の姿――ー自分の最も大切だった、いや今でもそれは寸分も変わるこの無い少女の可愛らしい顔。だがその髪は黒く、瞳は紅い――ー

「・・・てめえら・・・?!」

ボーボボは後ずさる。どういうことだ？こいつらは俺が――ー

「あんなんで死ぬわけないじゃん・・・って、アンタ手加減してた  
だろ」

黒い少女は微笑を浮かべている

「なあ、お前――ーあの子はどこにいった？」

黒い大男がボーボボに問いかける

「・・・仲間達とは別れた。皆それぞれの道に向かつて歩き出した」  
ボーボボはその問いに答えたが、目の前の男と少女はいきなり笑い出した

「あっはははは！何言つてんの？アンタ？」

「ばつかだなーコイツ！なあー・・・ティ」

「何が可笑しいんだテメエ等！」

ボーボボは思わず声を荒げた

「おつかしいに決まってるじゃん！アンタなんであの子連れて来なかつたんだよ？なんだよあの代りみたいなのはさ？あのハジケおチビがアンタをかわいそーに思ってるに連れてきてやってんの位分かってんだろ？」

「あんなガキにあの子渡しやがって、なんだ大人の男でも気取ってるのか？バツカじゃねえのーテメエはいつもそーだな。いつも本当の感情はサングラスの奥に隠しやがって、結局最後は一人を選んでしまっただなあ」

ボーボボは二人の言葉に心を凍らせられた。ああ、そうだー

「三世も倒したし、あとは残党狩りだなービュティ、行くぞ」

「待つてよボーボボ！」

「ーボーボ・・・ボーボボさん！待つて下さい！ビュティさんも・・・」

「なんだ？ヘッポコ丸。お前はププーシティに戻るんだろう？」

「は、はいーでも・・・」

「どうしたのへっくん？」

「ボーボボさん！ビュティさんを・・・ビュティと一緒に連れていてもいいですか？ー連れて行かせて下さい！」

「・・・へっくん・・・？」

「俺、俺はービュティを一人で守れる力を手に入れようって・・・ずっとそう思ってきました！思い上がりかもしれないけど・・・でも、やっとそれが出来るようになったと思うんです！だから・・・」

「・・・ボーボボ・・・」

「ビュティがボーボボさんを大好きなことはずっと、ずっと知ってました！でも・・・俺はまだボーボボさんよりは弱いけど、それでもー絶対ビュティを守って見せます！守りきってみせます、か

ら・・・」

「・・・へっくん？泣いてるの・・・？」

「・・・ビュティ、お前が決め・・・」

「え・・・私はー」

「いや、連いてってやれ」

「・・・ボーボボ？」

「ヘッポコ丸はお前を守りたくて守りたくて、必死に修行を積んでこれだけ強くなったんだ。俺も認める。ヘッポコ丸はもう、一人でもお前を守るさ。だから連いていつてやんな」

「・・・どうし、て・・・？私が・・・邪魔・・・？」

「んなわけねえだろ。何言ってんだよ。そりゃ俺もお前のツツコミがあればスゲー助かるし、一緒に居たいさ。ただよ、一年前ならいざしらず、やっぱり妙だぜ。お年頃の女の子がこんなオッサンとずっと一緒にいるってのはよ」

「・・・ボー、ボボ・・・」

「な？分かったな。連いてってやれ。今度はヘッポコ丸を助けてやってくれよ。なんだかんだでコイツの真拳ツツコミ所満載だしな」

「・・・ボーボボさん！いいんですか・・・？」

「あー。だがな、テメエ、ビュティにかすり傷一つでもつけたらタダじゃおかねえぜ？絶対守りきってみせろよ。テメエも、もう大人だ。男だ。一度した約束絶対に破るんじゃねえぞ」

「は・・・はい！ありがとうございます・・・！絶対に俺、ビュティさんを守ってみせます！約束します！」

「・・・ボーボボ・・・おわかれ、なの・・・？」

「なんて顔してんだビュティ。心配すんな。あのヘタレ小僧じゃ手に負えねエ敵が出てきたら俺の名前を叫べ。何処にいたって、何してたって、一秒で駆けつけてやるよ。お前の声なら地球の反対側にいたって聞こえるさ。だからよ、安心しなービュティ」

「・・・や、だよ・・・」

「大丈夫だから、な・・・いつか会いに行くさ。いつも忘れねえよ。」

お前は俺の一番の仲間だ。永遠にお別れって訳じゃねえんだ。いつか会えるさ。いつかー」

そして、最後のー柔らかい感触を確かめる為に、ぽん、とーその小さな頭に手を置いた

「あれ？固まっちゃったよ、コイツ」

少女はクスクスと笑いながら、俯き身動き一つしないボーボボを指差した

「テメエはバカだ。ほんまモンの大バカだ。俺を見るよ。俺はバカでも自分の宝物は間違えねえぜ。テメエの理性を組み込まれなくて良かったぜホント。なあー・・・テイ」

「仕方ないさ。コイツは神様の意思には逆らえないんだ。神様にも色んな事情があるってコト。分かってやんなよ」

ボーボボは笑い合う二人を見た。遙か、遙か遠くにー自分から置いて来てしまった光景をそれに重ねる

「じゃーな、俺等行くわ。テメエは其処で、ずっと同じ場所で、遠くばーーっか見上げて、自分に嘘つき続けてーずっと一人でいればいい」

二人はくりと踵を返すと、ゆっくりとボーボボから離れていった。さくさくという草を踏む音が序々に遠くなっていった

「ーーセエ・・・」

風に吹かれる草の音だけが響く草原に、小さな声が発せられた

「ウルセエんだよてめえら！」

ボーボボが天を仰ぐように顔を上げ叫んだ

「じゃあーじゃあどうすりや良かったんだよ！あの子が苦しむのを、泣くのを分かって俺の感情をぶつけろっていうのかよ！んなこと出来るわけねーだろ！ふざけんじゃねえー！」

ボーボボは自らのサングラスを掴み、それを地面に叩き付けた

「ああ分かつてる！俺アあの子がいなきゃダメなんだよ！ずっと一人だった俺の初めて見つけた宝物なんだよ！あんなちいせえ体で俺を庇って！心配して！ずっと無条件で信じて連いて来てくれたんだ！んな大切な存在を泣かせるよ！なこと出来るわけねえんだよ！ちつくしよおおおー！あいつら見せつけやがってー！」

サングラスという精神の壁を外した瞳からは、止め処なく涙が溢れ続け、真下の草を塗らして行く。どうしていいかわからなかった。あんなガキに、他の誰にも渡したくなかった。あの少年がいなければ彼女はずっと自分と一緒にいてくれたのか？ー違う。彼女は大人になっていくのだ。これから成長し、今は自分を慕ってくれている感情もまた成長していくのだ。成長は変化。彼女と自分では余りに住む世界と時間の流れが違いすぎる。そんなことは分かりきっていた。実際一年経って再会した彼女はまるで綺麗に咲いた花のようだった。これから益々美しくなっていくのだ。自分などその美しい成長に置いていかれるだけだー

認めるよ。俺はそれが怖かったんだ。いつかその日が来たら自分がどうなるのか、耐えられるのか

置いて行かれるのが怖かったんだ

置いて行かれるのは俺の方なんだー

あの時ー言えばよかったのか？俺について来いと、ずっとずっと俺の傍にいてくれ、とーそんな弱い姿を、あのー自分をヒーローと信じてくれてる少女に見せられるものかー

「見せりゃよかったんだよ」

ーふと、背後から声が掛けられた

「見せりゃよかったんだボロボボ。サングラス外してーお前の本当の素顔を」

少し離れた所に、首領パッチが音も無く立っていた

「神様は確かにそうしたかったけどーどうしても出来なかったけどよ」

「ー」



「――ビュティはきつと望んでたぜ？」

だけでもう遅いんだよ

一度手放した花は、空に舞い上がった花卉は  
決してこの手にはもう戻らない

「――じゃあ、また花を咲かせりゃいいじゃねえか」

「――なに、言つて・・・」

「また綺麗な花を咲かせて、会いに行こうぜ」

「――・・・ティ・・・」

綺麗な花を咲かせられたら  
いつか会いに行く

もしも

もしも俺が

お前に

会える程

花を咲かせられたならば

強くなれたのならば

会いに行く

お前が子供のままでなく

俺がお前への庇護の気持ちのままでなく

そうでなければ

ビュ  
ティ

もしも 会えたなら 共に笑おう

(後書き)

読んで下さってありがとうございました

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0603e/>

---

花弁（ボーボボのファンフィクション）

2010年10月10日03時03分発行